

菅原道眞の自然詠

－ 讃岐守時代を中心に －

鄭 順 粉*

目 次

1. はじめに
 2. 讃岐國への轉出
 3. 讃岐國と道眞
 4. 「秋」「菊」「月」
 5. <京>の自然
 6. おわりに
-

1. はじめに

菅原道眞(八四五～九〇三)は、八八六年讃岐守に任ぜられ、實質的な左遷を経験させられる。その讃岐において詠じられた詩が『菅家文章』卷三、四に收められているが、この讃州時代の一五二首の作品は、不本意な地方官を左遷と意識したことから、失意を主な内容とし、寂寥孤愁の心が切々と表現されている。従來の研究によって明白になっているように¹⁾、道眞の初めての挫折體驗の中から生み出されたものである點、他卷所收の詩篇とはいろいろと相違が認められる。つまり、讃岐守時代こそ京を離れて不如意な孤獨生活に置かれ、詩人の内面的な感情が鮮明に表出された時期であると言える。

ところで、この讃岐守時代を、作者の心情表白の面―すなわち敘情詩としての面―ではなく、作品世界の性格の面つまり作者の志す方向から見た場合にも、はたして變化が生じたのだ

* 培材大學校 助教授 日本古典文學

- 1) 道眞の讃岐守時代に關する考察には、基本的な伝記として藤原克己「第三章 讃岐時代」(『菅原道眞 詩人の運命』ウェッジ選書12 2002 9 p.111～p.174)があり、他にも上原晴子「菅原道眞詩研究―讃岐と大宰府時代」(『香川大學 國文研究』第二十一号 1996)や宮内克活「讃岐時代の菅原道眞について―その嘆老表現を中心として」(『漢文學學報』第三十三輯 1988 1)、遠藤光正「讃岐時代の菅原道眞と『寒早十首』」(『東洋研究』第1113号 1994 11)などがある。また、「菊」「梅」「雪」「月」「竹」などの詠物を考察した論文の中にも讃岐國時代の詩の表現やその傾向が論じられている。従來の研究は、主に不遇な境遇の中で深化した道眞の詩境や獨自主な表現を探るところに集中している。

ろうか。詩創作という面から見ると、讃岐國への轉居は、作者を囲む環境、中でも詩の主要題材である自然環境が大きく變ったことになる。自然が變った時點で、道眞の詩世界の性格が變化したのかどうか、を考える必要があるだろう。なぜなら、漢詩において自然は作品世界の方向を暗示するメルクマールとして機能するからである。

本稿では、菅原道眞の讃州國時代の作品を自然を中心にして考察する。つまり、律令官僚で宮廷詩人として活躍していた菅原道眞が、文人官吏としての顯職を解任され、讃岐の地に轉出された時期に制作された漢詩文に表わされた自然の意味について考えてみたいと思う。

2. 讃岐國への轉出

菅原道眞は、祖父清公と父是善ともに文章博士を務めた學者の家系に生まれた。幼少より詩歌に才を見せ、八六二年十八歳で文章生試に及第し文章生となる。八六七年には文章生定員二十名のうち二名が選ばれる文章得業生となり、正六位下に叙せられる。その後、八七〇年には方略試に合格し、正六位上に叙せられ、八七四年には從五位下となり、兵部少輔、ついで民部少輔に任ぜられた。八七七年には、三十三歳でいよいよ家の職である文章博士に就任し、學者としての最高の榮進を繼げた。また、八七九年、從五位上に叙せられる²⁾。

ところで、そのように文人儒者の頂點に立った道眞が八八六年讃岐守に任ぜられる。それは客觀的にはともかく道眞自身にとっては、左遷にほかならなかった。道眞は、讃岐國轉出にあたって、式部少輔・文章博士・加賀權守の三官を解かれる。文章道出身の文人官吏としての顯職をすべて解任されたのである。

この八八六年正月の除目は、文人層の交替と後退の現像を反映したもので、政界が詩人肌文人官吏から實務家肌文人官吏へと變わる契機となるものである。道眞は、しばしば自らを「詩臣」と称しているように、「詩道」によって生きようとした、徹底的に詩人肌文人官吏に屬する。「詩道」とは、「美刺諷諫」(『詩經』『毛詩』大序)の精神で、天子の政治が正しく行われていると、それを譽め称え、道を誤っていると、それを刺り諫めることである。鴻儒詩人を理想とした道眞は、四季折々の風月に寄せた頌詩を天子に獻ずること、それを最も誇りと思っていた。

ところで、九世紀後半から實務的な學儒、つまり詩を詠まない儒者の方から「詩人」の實用的でないことを非難し、詩人肌文人官吏を攻撃し始める。いわゆる「詩人無用論」である。道眞と同時代の詩人島田忠臣の詩の中にも「儒家は問答う詩は無用なり」(『田氏家集』卷上「春日風景、訪同門友人」)と述べられており、それにはさらに「近來盛んに詩人無用論と善う」という注

2) 道眞の官位昇進については、藤原克己氏の前掲書に詳しい。p.79~p.110。

記も付されている。また、当時の實態については、『本朝文粹』の中にも次のように表わされている。

對殘菊待寒月

紀納言

九月十日 於朱雀院後朝之宴 各獻秋思入寒松之詩
皇子被命 同亦上詩 文體非凡 興託可觀
近代皇子 未有此比 於是右大將 顧相視曰
如吾輩者 殆不可及 須他日相尋 以爲吾道之宗
隨聲而應 記心不忘 以至今日 本之志也
夫交無貴賤 無新舊 志得則膝漆生於一言
道合則風雲感於千里 斯言不虛 於今知之
于時殘菊猶在 寒月欲明 對菊待月 且述懷曰
世之惑者 多嘲文士 彼我殊觀 誰敢改業
從今而後 及生之涯 每至月之夕 雪之朝雜花生樹
危葉辭枝 觸物催感 乘興思人之時 不期相尋
不契相會 雖無盃杓 無管絃 一詠一吟遣懷於筆硯之間耳
言約已成 交情亦定 聯記本末 以作後日之張本也云爾

(『本朝文粹』卷十一)³⁾

この詩は、九月十日朱雀院重陽翌朝の宴において紀長谷雄が獻じたものであるが、時に殘菊に對し寒月を待ち、情を述べてみると、世のある者は文士を軽く思うが、それは親しく思うものがそれぞれ異なるのであって、己れの詩人としての業を変えることはできない、と述べる。當時の文人社會の内部における分層化を意識し、それに對する憂いを表明している。

そして、そのような「詩人無用論」はひとり儒門の内部的な鬭争にとどまるものではなかった。當時對立していた天皇系と藤原氏の葛藤を極大化する政治的な問題にまで擴散していった。藤原攝關家は、政權壟斷の一段階として名族伴氏追放政策とともに「詩人無用論」を意圖的に誇張させる。藤原氏の攝關制確立の中で、いよいよ文人層抑壓がはじまったのである⁴⁾。

特に菅家一門は、學者の家柄として官途に進出する徒がますます増える名門であった。當時、菅原氏の經營する私塾「菅家廊下」において、受業の門人は雲のように多く、しかもこの菅家の門より輩出した秀才や進士は約百人に及び、學問に志す者は、これを龍門と名づける程で

3) 『本朝文粹』の本文引用は、柿村重松『本朝文粹註釋』下(内外出版 1922 3)に據る。

4) 「詩人無用論」の詳しい内容については、後藤昭雄「文人相輕」(『平安朝漢文學論考』櫻楓社 1981 9)に述べられている。p.79～p.93。

あった。その現象は『菅家文章』にも次のように書いてある。

書齋記

東京宣風坊有一家。家之坤維一廊。廊之南極有一局。局之開方、纔一丈餘、投歩者進退傍行、容身者起居側席。先是秀才進士、出自此局者、首尾略計近百人。故學者目此局爲龍門。又號山陰亭、以在小山之西也。戸前近側、有一株梅。東去數歩、有數竿竹。每至花時、每當風便、可以優暢情性、可以長養精神。

(『菅家文章』卷七 五二六)⁵⁾

菅家の私塾とは、佐京の四條大路と五條大路に挟まれた區畫である宣風坊にあった、道眞邸の西南の渡り廊下をいう。この私塾は、道眞の父是善が世俗のことを忘れて風月を賞し吟詩を楽しむために作ったもので、八八〇年、六十九歳で父是善が亡くなった後は、道眞が主宰していた。

結局、道眞の私塾の繁盛ぶりに威脅を感じた他の學者や官僚は、一時道眞を地方に追い遣ろうとしたのである。道眞が地方官に任官したことは以前にもあったが、それは權官の下野權少掾や加賀權守の時であって、直接任國に赴任する必要はなかった。しかし、今回の讃岐守は權官でなく正官であるから、遙任は許されない。

菅家の家學の繼承者として當然のごとく中央の官僚社會で活動すべき道眞が、はじめて経験する地方官轉出は、大變苦しいものであったに違いない。身慣れぬ讃岐國で生活した四年間は、彼の人生において大きな轉換點となり、平安京から離れた地方生活の中で、道眞の文學觀や詩の世界もより深化したと見られる。第一、親しんだ華麗な宮中生活はもうそこにはなかったからである。

3. 讃岐國と道眞

讃岐國は、空海や円珍らの名僧とともに、明法學者として名高い讃岐永直(七八三～八六二)をも出した國である。また、良吏と評された藤原保則(八二五～八九五)もこの讃岐國の國守をしている。そのような讃岐國であっても式部少輔や文章博士という家門傳來の職を離れて⁶⁾、南海の讃岐國へ旅立つ道眞の心情は、決して安らかなものではなかった。

5) 『菅家文章』の本文引用は、岩波書店の大系本を用いる。以下同様。川口久雄『菅家文章 菅家後集』(1966) p.535～p.536。

6) 道眞は、家風を常に意識し、重んじていたが、それについては、例えば、山本登朗『家の風』—菅原道眞

讃岐赴任決定直後の正月二十一日に、道眞は宮中の内宴に参列している。その時同席していた左中辯藤原佐世(未詳～八九七)に後日道眞が詩を贈る。佐世は、太政大臣藤原基經(八三六～八九一)の家司で、道眞の推薦によって藤原氏ではじめて獻策した人物である。道眞の詩(『菅家文草』卷三 一八五「尚書左丞餞席、同賦贈言、各字一字」)の中にも表わされているように、學者の中では、讃岐國赴任の際、送別の宴を催してくれる程、道眞には好意的な人であった。

予爲外吏、幸侍内宴裝束之間、得預公宴者、雖有舊例、又殊恩也。王公依次、行酒詩臣。相國以當次、又不可辭盃。予前佇立不行。須臾吟曰、明朝風景屬何人。一吟之後、命予高詠。蒙命欲詠、心神迷亂、纔發一聲、淚流嗚咽。宴罷歸家、通夜不睡。默然而止如病胸塞。尚書左丞、在傍詳聞。故寄一篇、以慰予情。

自聞相國一開唇 (相國の一たび唇を開きたまふを聞いてより)
何似風光有主人 (何ぞも 風光の主人にのみ有るが似くならむ)
忠信從來將竭力 (忠信もて 從來 まさに力を竭くさむ)
文章不道獨當仁 (文章は獨り仁に當れりとのみ道はざりき)
含誠欲報承恩久 (誠を含みて報いむことを欲りして 恩を承くること久し)
發詠無堪落淚頻 (詠を發して堪ふることなく 涙を落すこと頻なり)
若出皇城思此事 (若し皇城を出でて 此の事を思はませば)
定啼南海浪花春 (定に啼かまし 南海 浪花の春)

(『菅家文草』卷三 一八四)7)

詩の序、特に下線部においては、當日席上において基經から酒を賜った時、基經が道眞に向って白詩の「明朝風景屬何人」句(『白氏文集』卷十四「答元奉禮同宿見贈」)を自ら吟じ、それを道眞にも聲高く吟誦するように求めたところ、道眞は一聲發したのみで、後は涙が溢れて鳴いてしまったという。基經が「明朝風景屬何人」と白詩句を吟じ上げたのは、表面的には官僚生活の多忙さを表わしているが、その裏面には、道眞の赴任の意を込め、明日以後の新しい任地の風景が道眞に屬されるとの意を寓して、ひそかに道眞を慰めようとしたものである。基經⁸⁾は、學問好きで平素道眞の才を愛していた。しかし、その心入れの意向を察しえない道眞ではないが、悲哀の念にたえず、つい號泣してしまった、という。

詩においては、道眞は基經の句吟誦に對して自然風光は元來主人が決められていないと抗議

の表現」(『磔』第190号 2002 8)などに論じられている。また、氏は、この論文において、「風」の擬人化、「家風」の見立て表現などを指摘し、當代第一の學者詩人であった道眞の表現に、複雑に入り込んだ和と漢の表現の交錯の姿が見え隠れすることを述べている。

7) 前掲書。p.248。

8) 藤原基經は、當時五十一歳で、道眞より九歳の年長であった。

の辯を述べている。これは、『白氏文集』の「勝地本來無定主 大都山屬愛山人」句(卷十三「遊雲居寺、贈穆三十六地主」)⁹⁾による表現で、自然の美しさは見る人の心のうちにある、という意味である。當時流行していた白詩句をもって基經の言葉に軽く反撥してみせたのである。續いて、これまで忠誠と信義とをつくしてお仕えしようとつとめてきて、詩を作ることを鼻にかけたりはしなかった、と自分の無實をうったえる。また、最後には、このことを京を離れた後に思い出すなら、南海の浪の花の上で啼くだろうと、心の寂しさを強く打ち出す。

このように、道眞にとって讃州國赴任はとても嘆かわしく悲しいものであったが、そのような心情は、赴任の道すがら詠じた詩においても述べられる。平安京から讃岐へ赴任する旅の途中詠じた<行路の作 二首>の中の一首を見てみる。

中途送春

春送客行客送春 (春は客行くひとを送り 客は春を送る)
傷懷四十二年人 (懷を傷ぶ 四十二年の人)
思家淚落書齋舊 (家を思ひて涙は落つ 書齋い舊りにたらむ)
在路愁生野草新 (路に在りては愁へ生ず 野草ぞ新なる)
花爲隨時餘色盡 (花は時に隨はむがために餘れる色し盡きぬ)
鳥如如意晚啼頻 (鳥は意を知るが如くにして晩の啼きや頻なる)
風光今日東歸去 (風光 今日 東に歸り去る)
一兩心情且付陳 (一兩の心情 且がつ付陳せむ)

(『菅家文草』卷三 一八八)¹⁰⁾

第一句「春送客行客送春」は、白詩句の「居人思客客思家」(『白氏文集』卷十四「望驛臺三月三十日」)や「不獨送春兼送春」(『白氏後集』卷八「送春」)から影響を受けたもので、三月盡日に行く春を惜しむ心を表わしている。また、第二句「傷懷四十二年人」¹¹⁾は、例えば「四十六時三月盡」句(『白氏文集』卷十七「春去」)のように、白詩から作詩年齢を示す傾向を學んだ表現である。つまり、この詩は、時の推移や年齢の自覺によって傷心し、その自己の歎息を「花」「鳥」「風光」などの自然物を擬人化し假託して表わしていると見られる。

ところで、上記詩の詩想はそれだけではない。その「惜春」の念は、平安京を離れる望郷の情とあいまっていっそう深化している。第三句の「書齋」とは、宣風坊の菅家の書齋「山陰亭」を言

9) この句は、當時日本で流行し、『千載佳句』や『和漢朗詠集』の中に採られて収められた。

10) 前掲書。p.250。

11) 當時、四十二歳は晩年であった。宮内克活「讃岐時代の菅原道眞について—その嘆老表現を中心として」(『漢文學學報』第三十三輯 1988 1)には、讃岐國へ轉居してから道眞の嘆老表現が増えることが述べられている。

う。この「山陰亭」は、平安京の宣風坊にあった私塾で、前節でも述べたように、菅原氏の學者の家柄としての名譽や自矜を象徴するものである。四十二年間慣れ親しんだ平安京の家や、式部少輔・文章博士という父祖傳來の職務を離れて地方に向う今、その道の野草にも旅愁をそそられ悲しむのである。讃岐下向に對する道眞の慨歎が、好時節である春を送る哀惜の心情と融合してより強い形で描き出されている。

4. 「秋」「菊」「月」

離れがたい京を後にして、いよいよ任地の讃岐國に到着し、新しい生活が始まる。しかし、道眞は讃岐守として治世に勵み奔走な日々を送りながらも、つる京への思慕の念は、堪えがたい。讃岐國で暮しながらも詩制作はあいかわらず道眞の心のよすがとなったが、中で自然を詠じた詩には、道眞の心境がよく表わされている。自然を題材にした詩の中で、基本となる季節・植物・天象物の三つの観点から、代表的な自然物を取り上げて考えてみることにする。「秋」「菊」「月」は、詠出の回数も多いだけでなく、作者の心境と重要な関わりをもっていると見られる¹²⁾。

まず、「秋」について考えてみたい。

八六六年正月に讃岐守に任ぜられた道眞は、當年三月の末に平安京を發つ。赴任途上で、すでに考察した「中途送春」を含めた二首の詩が惜春の情とともに詠じられる。その後、任地の讃岐國で夏を迎えるが、この夏の詩としては一首(『菅家文草』卷三一九一「金光明寺白講會有感」)しか見られない。その夏の詩は、三十日間續いた早が讀經によってようやく止んだことを詠じたもので、道眞の地方受領としての一面をも垣間見せるものになっている。

ところで、その年の秋になって詩作の回数が急に増える¹³⁾。秋にこそ涼しくなった風や皎々たる月光によって孤獨や望郷の情が掻き立てられたのであろう。次の詩を見てみよう。

秋

涯分浮沈更問誰 (涯分浮沈 更に誰にか問はむ)

秋來暗倍客居悲 (秋よりこのかた暗に倍す 客居の悲しみ)

老松窓下風涼處 (老松の窓の下 風の涼しき處)

12) 一般的に自然と言えば花鳥風月をいうが、ここでは四季もその中に入れている。

13) 「秋」は、道眞の讃州時代と大宰府謫居の時に、特に多く詠じられる季節である。しかも、次にあげる「菊」と「月」も、秋に關連する自然物である。道眞の孤獨と絶望の心境が最もこみ上がってきた季節と見られる。上原晴子「菅原道眞の『悲秋』『殘菊』『小松』をめぐって」(『香川大學國文研究』第17号 1992)にも、秋と道眞の不遇の時期との關係について述べられている。

疎竹籬頭月落時 (疎竹の籬の頭 月の落つる時)
不解彈琴兼飲酒 (琴を弾くことと酒をのむことを解せず)
唯堪讚佛且吟詩 (ただ佛を讚し また詩を吟ずるに堪へたり)
夜深山路樵家罷 (夜深けて 山路に樵家罷む)
殊恨隣鷄報曉遲 (殊に恨むらくは 隣鷄の曉を報ぐることの遅きことを)
(『菅家文草』卷三 一九六)¹⁴⁾

山近い官舎で、夜眠れず愁心に沈み詠じた詩である。第六句の、秋の夜客舎でただ一人琴も弾かず酒も飲まずにいるという詩想は、白居易の「北窓三友」の詩(『白氏文集』卷六十二)の、琴・詩・酒を三友とする句を意識したものである¹⁵⁾。「北窓三友」の詩は、白居易が太子賓客として東都洛陽にあった時期の作品で、書齋で三友を得た喜びを述べ、琴を弾き終えると酒盃を傾け、飲み終えれば詩を吟じ、繰り返して終わることがない生活を描く。道眞の當該の詩は、白詩に外枠を借りながら、実際は意図的にズレを生じさせていることに妙味があると考えられるが、君子の必修教養の一つ琴の練習をやめて家學である詩に専念する意を述べた詩は、他にも「停習彈琴」(『菅家文草』卷一三八)がある。菅家傳統の紀傳の家風を守ろうとした道眞の姿勢を窺わせる一句である。

まず第一句では、このような不如意な生活に満足してよいものなのかと自問し、讚岐守として外勤している自分をみつめる。そして、それを尋ね問う相手も居ないと、絶対絶命の孤獨感を表わす。第二句では、自問自答をむなしく繰り返しているうちに、秋が来ていっそう客愁が増すと自から歎いている。

秋を悲しい季節とする観念は、もともと中國の漢詩からきたものであるが、この詩においては、道眞の旅住まいの悲愁の念が、秋日の時間的な推移に従って述べられる。これを簡略化して圖式化してみると、第三句「風涼處」の夕方→第四句「月落詩」の夜→第七句「夜深」の深夜→第八句「隣鷄報曉」の夜明け、となる。この詩では、「秋」が悲哀の季節としてとらえられ、客地での孤獨感をかきたてるものとして機能している。道眞の政治的な不遇、名譽の喪失、老いなどに對する歎息や悲哀が秋という季節を通してより切實に表出されている。

秋は、草木が變色し枯れ落ちる凋落の季節である。その「秋」の一般的な性格に、道眞は新しい詩境を開け出し、讚岐國への轉居という自分の現實的な境遇を重ね合わせて、そこに無限の寂寥感や悲愴感を創り上げていると言えよう。

14) 前掲書 p.256~p.257.

15) 道眞が白詩の影響を如何に多く受けているかについては、從來様々な角度から論じられてきたところである。例えば、松浦友久「『白氏文集』と『菅家文草』—詩歌の風論性をめぐって」(『古典の変容と新生』1984 11)、菅野禮行「菅原道眞の白詩受容」(『斯文』第110号 2001 3)、波戸岡旭「白詩の受容と菅原道眞—平安朝漢詩の展開」(『國學院中國學會報』2002 12)、同氏「花に語りかける詩人—菅原道眞と白居易」(『アジア遊學』第2号 1999 3)などがある。

道眞が讃州時代に詠じた植物、いわゆる草木花には、菊・竹・櫻・芭蕉などがある。中で「菊」は、道眞が最も愛好した花の一つで、その重要性についてはかつて幸田露伴によって説かれてから、多くの論において指摘されている¹⁶⁾。道眞が特別に菊を愛したのは、その色香が美しく、不老長生を象徴する花だからであるが、他にも理由があった。菊花は、宮廷行事の重陽の宴¹⁷⁾を想起させる花だったからである。特に宮廷詩人を自負した道眞にとって、落膽し悲嘆に暮れた讃州時代にこそ、その意味はいっそう大きくなり、菊花を自らの心身を癒すよすがとして詩に詠じたのであろう。例えば、次のようなものがある。

重陽日府衙小飲

秋來客思幾紛紛（秋よりこのかた 客の思ひの 幾ばくか紛紛たる）
況復重陽暮景曛（況復むや 重陽暮の景の曛れむや）
菊遺窺園村老送（菊は園を窺はしめて村老送る）
萸從任土藥丁分（萸は土に任すに従ひて藥丁分つ）
停盃且論輸租法（盃を停めては且く論ふ 租を輸す法）
走筆唯書辯訴文（筆を走せては ただ書く 訴へを弁ふる文）
十八登科初侍宴（十八にして登科し 初めて宴に侍りけり）
今年獨對海邊雲（今年は獨りい對ふなり 海の邊なる雲）
（『菅家文章』卷三 一九七）¹⁸⁾

讃岐に赴任してはじめて迎える重陽の節に、國府の廳においてささやかな宴を開いた時の作である。秋がきてことに旅愁にせめられる中、重陽節の夕日が暮れようとする。村の翁が送ってくれた菊をながめながら政事をしているが、十八歳に登科して毎年のごとく宮中の重陽の宴に列座してきたにもかかわらず、今年は一人さびしく南海の秋雲に對している、と嘆く。

村の長老から菊を分けてもらい藥園から邪氣拂い用の茱萸も調達して張ってみた重陽の小宴は、宮中の詩宴にはとても及ばない。しかも、府衙の小宴では、重陽の詩を吟ずるのではなく、租税の話をし民の訴状を決済することであった。天子の宴で詩を侍することを己の使命と考える道眞にとっては、讃岐國で迎えた重陽節はかえって現在の不遇な境遇を照らし出し悲しみを

16) 「梅と菊と菅公と」(『露伴全集』十九卷 岩波書店 1978)。比較的最近のものとしては、例えば、本間洋一「菅原道眞の菊の詩について」(『東洋文化』復刊55号 1985 8)、波戸岡旭「菅原道眞『寄白菊四十韻』について」(『國學院雜誌』1996 11)、同氏「花に語りかける詩人—菅原道眞と白居易」(『アジア遊學』第2号 1999 3)、上原晴子「菅原道眞の『悲秋』『殘菊』『小松』をめぐって」(『香川大學國文研究』第7号 1992)などがある。

17) 道眞が宮中の重陽の宴に如何に愛着を持っていたかは、波戸岡旭「菅原道眞重陽宴詩考」(『國學院中國學會報』1992 10)に詳しく述べられている。

18) 前掲書 p.257~p.258。

増すものである。ここで、菊花は宮中の重陽節の宴會を呼びおこす象徴物で、平安京を離れて客地にいる孤獨感をにじみだすものとして機能する。

ところで、この詩における菊は、あまり實體感のない形で詠じられている。道眞にとって村老からもらった菊は、華麗な宮中の宴を想起させるものでしかない。菊花そのものに對しては何の感慨もわからない。常に宮中の「詩臣」であることを望む道眞は、もっぱら宮中の重陽の詩宴を思い出し、誇り高かったかつての榮華を懐かしむのである。

讃州時代に詠じられた天象に關するものは、「月」と「雪」とがある。「雪」を題材にした詩は、二首のみで、道眞の國守として國の豊作を願う心と、自分の清淨さや潔白を訴える心とが共存する形で表わされる¹⁹⁾。それに比して、「月」は吟じられた回数が多く、それに道眞の感情入れも深い。それは、道眞が幼少の時から壯年期まで菅家の觀月宴を経験しており、白樂天などの翫月詩の影響を多く受けていて、月への關心度が極めて高いからである。特に、平安京から遠く離れた南海の讃岐で眺める讃岐の月は、望郷の情を募らせるのみのものであった。一つの例をあげてみる。

秋天月

千悶消亡千日醉（千悶消亡す 千日の酔ひ）
百愁安慰百花春（百愁安慰す 百花の春）
一生不見三秋月（一生に三秋の月を見ざらませば）
天下應無腸斷人（天下に腸斷ゆる人無からまし）

（『菅家文章』卷三 一九五）

讃岐赴任後のはじめての秋に詠まれた詩である。千・百・三・一の數字をたたみこんだ技巧的な一首であるが、秋月が人の愁いを益す詩想は、直接には白居易の「萬里清光不可思 添愁益恨遠天涯」（『白氏文集』卷十六「仲秋月」）の詩趣を受けたもので、ここでは、澄んだ秋の夜の照る月にさまざまと時の推移を感じ、自分の老いゆく様子を歎じている。月を見て旅愁を新たに自分の氣持から、秋天の月は、人間の限りない感慨を催すということを強調する。

ところで、道眞にとってその旅愁望郷の念というものは、中央官僚の道から追い出されたことと深く関わっている。今日前にある讃岐の月は、平安京から遠く離れた道眞を悲しませ、また憂愁に沈ませるものである。讃岐の月は、結局、中央官僚として復権し、宮中の詩宴で詩を獻上することを渴望する道眞の心境をそのまま映すものであったのである。

讃岐守としての四年間は、「詩臣」として矜持する道眞にとって暗鬱で憂愁の日々であった。道眞は、その悲しみに沈む胸中を詩に吐露し續けるが、その詩の中には當然折々の讃岐の自然

19) 波戸岡旭氏「菅原道眞詠雪詩考」（『國學院雜誌』卷100 4号 1999 4）の中に述べられている。

が詠み込まれる。しかしながら、その自然はあまり實體のない形で詠じ出される。それは、道眞が讃岐の新しい自然に接しそれを詩に詠じながらも、心は満たされず、平安京の宮中の詩宴こそわが文學發現の場であると思い、歸京を渴望しているからである。

5. <京>の自然

以上考察をしてきたように、道眞は、讃岐に赴任して地方官としての生活を営みつつも、なお草深い讃岐には慣れず、華やかな平安京のことを戀しく思う。讃州時代の詩に表わされた<京>の自然について検討し、それに表わされた道眞の心境についてもう少し具体的に考えてみる。まず、讃岐に下った八八六年の初秋(七月)に詠まれた、次の詩を見てみよう。

早秋夜詠

初涼計會客愁添 (初涼 計會して客愁添ふ)
不覺衣衿毎夜霑 (覺えず 衣衿の夜毎に霑ぶことを)
五十年前心未嬾 (五十年前 心 嬾からず)
二千石外口猶掛 (二千石外 口なほ掛す)
家書久絶吟詩咽 (家書久しく絶えて 詩を吟じて咽ふ)
世路多疑託夢占 (世路疑ひ多くして 夢に託して占ふ)
莫道此間無得意 (道ふことな 此の間に得意なしと)
清風朗月入蘆簾 (清風朗月 蘆簾に入る)

(『菅家文草』卷三 一九二)²⁰⁾

清涼の氣が旅愁を新たにかきたてる中、京の家から手紙も久しく届かず、詩を吟じて客愁をまぎらわしひそかに涙ぐむ。そして、府廳の官舎のいなびた葦で編んだ簾に訪れる清風と明月が心の友であると自嘲する。

この場合、「清風朗月」は受領のしごと以外には口をつぐんでいる道眞にとって唯一の心のやりばになっているが、それは實は京の官辺の筋について訴えたい氣持を抑制するためのものでもあった。すなわち、自分の無實さや清浄さを主張したい胸の中の鬱憤を打ち明かす相手もない孤獨を述べており、「清風朗月」はその孤獨を深化させる媒介物として機能する。ここで、讃岐の自然は道眞の内面から見ると、讃岐のものとして意味を持つのではなく、やがては平安京へと回歸するものである。

20) 前掲書 p.252~p.253。

讃岐の自然が京へと回帰する實體についてももう少し考えてみよう。讃岐に赴任して三年目の秋の作に次の詩がある。

九日偶吟

客中三見菊花開 (客中三たび菊花の開くを見る)
只有重陽毎度來 (ただ重陽 度毎に来ること有り)
今日低頭思昔日 (今日頭を低れて昔の日を思ふ)
紫宸殿下賜恩盃 (紫宸殿下に恩盃を賜ひにしことむ)

(『菅家文草』 卷四 二六七)²¹⁾

初句は、白詩の「九日醉吟」(『白氏文集』卷十七)の第三句・第四句「一爲州司馬、三見歲重陽」とある表現を踏まえたもので、どうしようもない作者の苦惱を響かせながら、歳月の推移を現わすもの、つまり季節の移ろいを示す景物として「菊」を用いている。また、第二句では、白詩句「一爲州司馬 三見歲重陽」(『白詩文集』卷二十「九日醉飲」)に倣って、秋になると、必ず九月九日の重陽の節が到来することを述べる。すなわち、第一句・二句においては、三年という自然の時間と重陽節という人事の時間とが同時に成り立ち、作者の心情表白の契機が作り出されている。

そして第三句では、その心情が過ぎ去った昔の日々に對するものであることを示す。その昔の日のこととは、平安京で宮中の重陽節の宴に出席していた頃のことであり、具体的な内容を次の第四句で明かしている。それは、他ならぬ紫宸殿で恩盃を下賜されたことである。毎年の重陽の節には、天皇が紫宸殿に出御、菊酒を侍臣文人に賜ったのである。つまり、第一句における「菊」は、宮中の重陽の宴に配られた菊酒を象徴するものであった。

この詩は、菊(重陽節)を媒介にして現在と過去とを繋げ、過去に對する思慕の念を表現したもので、その實體は平安京であり、宮中の天皇だったことが明らかになる。

ところで、讃岐守時代の作の中に詠まれた自然そのものも、ある場合は平安京の宮中や自邸のものであることもしばしばあった。春に詠じられた詩の中に次のような一首がある。

春詞二首

和風料理遍周遊 (和風 料理ひて遍く周遊す)
山樹紅開水綠流 (山樹紅に開き 水綠に流る)
自古人言春可樂 (古より人は言へらく 春は楽しぶべしと)

21) 前掲書 p.316。

何因我意凜於秋（何に因りてか 我が意の秋よりも凜たる）

（『菅家文草』卷四 二八二）

雨後江辺草染來（雨の後 江の辺 草染來れり）

遙思去歲始花梅（遙に思ふ 去にし歳始めて花さきし梅を）

歸鴻若當家門過（歸らむ鴻の 若し家の門に當りて過ぎなば）

爲報春眉結不開（爲に報げよ 春の眉の結れて開けずと）

（『菅家文草』卷四 二八三）²²⁾

八八八年、のどかな春風が吹きおとずれて山も江もくまなくめぐりありく。その春風がきりもりして、山の木に紅の花をさかせ、川に緑の水を流す。また、府廳のほとりの綾川べり、春の雨がはれて、ひときわ草の緑が深く染ってきた。しかし、道眞は目前の讃岐の春景色は、ただ春愁・旅愁をつのらせるもので、心は却って平安京の自邸の梅の花を思い、北に歸る雁に、南海の私の眉は愁いにむすばれていることを伝えてほしい、と言う。

實際、道眞は平安京の書齋に梅を植えていた。道眞四十九歳の時に記した「書齋記」の中に次のように述べられている。

東京宣風坊有家。家之坤有一廊。廊之南極有一局。

（中略）

又號山陰亭、以在小山之西也。戸前近側、有一株梅。東去數歩、有數竿竹。每至花時、每當風便、可以優暢情性、可以長養精神。

（下略）

（『菅家後集』卷七 五二六）²³⁾

すなわち、平安京の宣風坊にあった書齋山陰亭に一株の梅の木を植え、春に咲き綻ぶたびに情性を優暢しているとし、道眞自ら植えた家の梅花への思い入れが如何に深かったのか窺える。

上記の詩は、美しい讃岐の春景色に魅了されながらも、心はいつの間にか愛好の平安京の自邸の梅へはしっていき、旅愁に悲しむ道眞の苦惱を表わしたものと見られる。結局、梅の花は、宮廷詩人として榮光の中の道眞自身を投影させた、<京>の自然なのである。

22) 前掲書 p.332。

23) 前掲書 p.535~p.536。

6. おわりに

道眞は晩年、讃岐守時代を振り返って「徴臣が道を失へる」(『獻家集狀』『菅家文草』卷十二六七四)時と言っている。學儒にして詩人である道眞にふさわしい要職から、突然の讃岐への轉出はかなりの絶望感をおぼえさせたに違いない。任地讃岐の自然は、平安京から離れた悲哀を募らせるのみのもので、自然そのものについては何の愛情も湧かない。讃岐の新しい自然は、道眞にとって讃岐という窮地での孤獨感を深化させる手段ではあっても、獨立的・主体的に詠まれるものではなかったのである。詩の主情である孤獨感が最終的に回歸するところは、他ならぬ平安京だったからである。

道眞が讃岐國に轉居したことは、ある意味では宮中の見慣れた限定的な自然から抜き出して、地方の新しい自然に接する機會を得たことになる。しかしながら、道眞は、讃岐の新鮮な自然には何らかの關心を持たず、もっぱらその心は京の宮中に對する思慕の念になってしまう。つまり、讃岐の自然は、獨立的には詠まれず、宮中の詩宴やそこに關わった人びと一天皇をはじめとして一を想起させる契機としてはたらし、都の人事へとつながっていく。道眞の詩において全体的に自然が自立せず人事の附屬物のような印象があるのも、そのためであろう。

結局、道眞の詩は、讃岐轉出を通して新しい自然を迎えても、自然を標榜する自然詩として發展せず、相変わらず感傷的な絳情詩として發展することが確認される。道眞の詩の世界では、讃岐國と<京>との距離は隔てることなく、却って密着・癒着した形で表わされる。それは、道眞に諷諭詩があまり見られないこととも關連すると思われる。

【参考文献】

- ・藤原克己(2002 9)「第三章 讃岐時代」『菅原道眞 詩人の運命』ウェッジ選書12 p.111~p.174
- ・上原晴子(1996)「菅原道眞詩研究—讃岐と大宰府時代」『香川大學 國文研究』第二十一号
- ・同氏(1992)「菅原道眞の『悲秋』『殘菊』『小松』をめぐって」『香川大學國文研究』第7号
- ・宮内克活(1988 1)「讃岐時代の菅原道眞について—その嘆老表現を中心として」『漢文學學報』第三十三輯
- ・遠藤光正(1994 11)「讃岐時代の菅原道眞と『寒早十首』」『東洋研究』第113号
- ・柿村重松(1922 3)『本朝文粹註釋』下 内外出版
- ・後藤昭雄(1981 9)「文人相輕」『平安朝漢文學論考』櫻楓社 p.39~p.93。
- ・同氏(1982 3)「菅原道眞の詠竹詩について」『香椎瀉』第27号
- ・川口久雄(1966 10)『菅家文草 菅家後集』岩波書店 日本古典文學大系 p.535~p.536。
- ・山本登朗 (2002 8)「『家の風』—菅原道眞の表現」『磔』第190号

- ・ 波戸岡旭(1992 10) 「菅原道眞重陽宴詩考」『國學院中國學會報』
- ・ 同氏(1999 4) 「菅原道眞詠雪詩考」『國學院雜誌』卷100 4号
- ・ 同氏(1991 12) 「菅原道眞詠月考」『漢文學會會報』第37輯
- ・ 同氏(1994 3) 「菅原道眞詠梅考」『國學院雜誌』第95卷 第3号
- ・ 同氏(2003 2) 「菅原道眞の詩觀」『菅原道眞論集』
- ・ 同氏(2002 12) 「白詩の受容と菅原道眞—平安朝漢詩の展開」『國學院中國學會報』
- ・ 同氏(1999 3) 「花に語りかける詩人—菅原道眞と白居易」『アジア遊學』第2号
- ・ 本間洋一(1985 8) 「菅原道眞の菊の詩について」『東洋文化』復刊55号
- ・ 松浦友久(1984 11) 「『白氏文集』と『菅家文草』—詩歌の風諭性をめぐって」『古典の変容と新生』

K C I

要 旨

菅原道眞は八八六年、讃岐守に任ぜられ、實質的な左遷を経験させられる。その讃岐において詠じられた詩が『菅家文章』卷三、四に收められているが、この讃岐時代の一五二首の作品は、不本意な地方官を左遷と意識したことから、失意を主な内容とし、寂寥孤愁の心が切々と表現されている。學儒にして詩人である道眞にふさわしい要職から、突然の讃岐への轉出はかなりの絶望感をおぼえさせたのであろう。

ところで、この讃岐守時代を、作者の心情表白の敘情詩としての面ではなく、作品世界の性格の面、つまり作者の志す方向から見ると、まったく異なる面が見える。詩創作という点から考えた場合、讃岐國への轉居は、作者を圍む環境、中でも詩の主要題材である自然環境が大きく變ったことになる。その自然が變った時、道眞の詩世界の性格がはたして變化したのか、を考える必要がある。

道眞が讃岐國に轉居することになったのは、ある意味では宮中の限定的で類型化された自然から抜き出して、地方の新しい自然に接する機会を得たことになる。しかしながら、道眞は、讃岐の新鮮な自然には何らかの關心を持たず、もっぱらその心は京の宮中への思慕の念になってしまう。讃岐の自然は、獨立的に詠まれず、宮中の詩宴やそこに關わった人びと—天皇をはじめとして—を想起させる契機としてはたらき、都の人事へとつながっていくのである。道眞の詩において全体的に自然が自立せず人事の附屬物のような印象があるのも、そのためであろう。

結局、道眞の詩は、讃岐轉出という新しい局面を迎えても、自然を標榜する自然詩として發展せず、相変わらず感傷的な敘情詩として發展する面が見られる。道眞の詩の世界では、讃岐國と<京>との距離は隔てることなく、却って癒着・密着した形で表わされる。それは、道眞に諷諭詩があまり見られないこととも關連すると思われる。

キーワード：菅原道眞、自然、讃岐國、漢詩、白詩、秋、菊、月、京

투 고 : 2005. 8. 31
1차 심사 : 2005. 9. 10
2차 심사 : 2005. 10. 1

住 所 : (302-735) 대전시 서구 도매동 439-6 배재대학교 일본학과
電 話 : 011-783-9186
e-mail : sunbun@pcu.ac.kr